

# 宍道湖湖岸線の変遷と出雲流庭園

庭園文化研究分科会 原 裕二

## 1. 斐川町の出雲流庭園の特徴

庭園文化研究会では、本年度は斐川町内の普通の一般民家を訪ね、出雲流庭園の特徴や魅力について検討した。

このとき、案内役の三島氏が、「庭だけを見てもその魅力はわからない。屋敷構えや築地松、さらにそれを取り巻く風景、風土、地域の特色などを含めて考えることが重要である。」と言っておられたのが印象的であった。

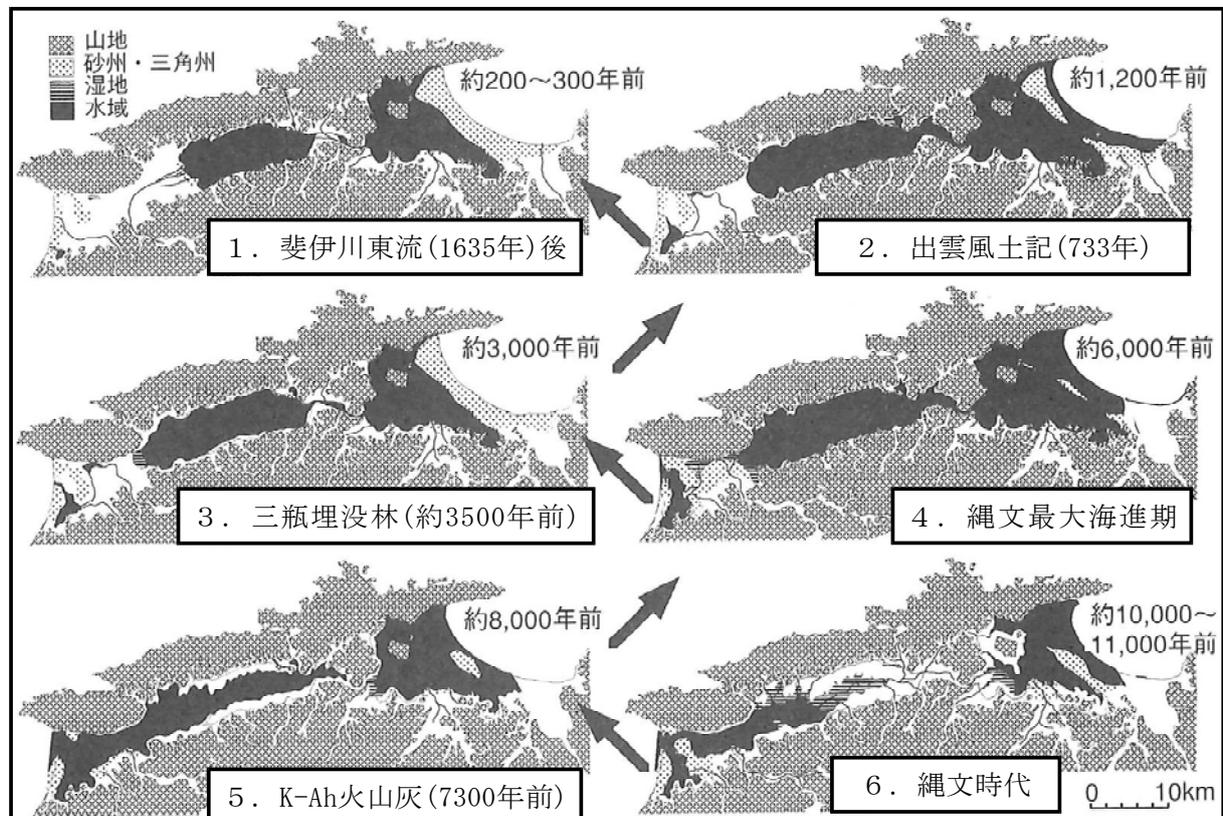
そこで本稿では、出雲平野を大局的に眺め、斐伊川の河道や宍道湖汀線の変遷と関連づけながら、庭園の特徴を考えてみたい。

## 2. 出雲平野の発達と歴史的背景

斐伊川は、1635年に完全に東流した。

完新世(11700年前)以降、東流するまでの間は、出雲市大津町と出西の間で出雲平野に出た後、島根半島の北山山地に近づいた箇所でも西に折れ、浜山砂丘を迂回して神門水海に注いでいた(第1図)。しかし、現在のように明瞭な河道があったわけではない。斐伊川の多くは西に流れていたものの、近世に至っては、東側にも数条の派流を出していたとされる(石塚, 2004)。

出雲平野西部では斐伊川東流後も集中豪雨のたびに破堤し、しばしば洪水に見舞われた。



第1図 宍道湖・中海の形成史 (高安, 2001)から引用・加筆

しかも、浜山砂丘や園の海岸砂丘が存在するため、非常に水はけの悪い湿地を形成していた。このように自然条件が悪い中で農業を営むには、高度な技術と多くの労働力が必要であり、開拓に当たっては強力なリーダーシップが求められた。たとえば、壇土手の築堤(朝日丹波)、菱根新田の開拓(三木与兵衛)、妙見山への植林(秦重成)、園村沢の干拓(秦喜兵衛)、差海川の開削(間島作庵・藤崎五右衛門)、荒木浜の開拓(間庭左平太・大梶七兵衛)、高瀬川の普請(大梶七兵衛)、古志・知井宮の開拓(岸崎左久次時照之・山本仁兵衛)、浜山の植林(井上恵助)など、土木建設の分野で地域の発展に寄与した人物は数多い(石塚, 2004)。

ところが、出雲平野東側つまり斐川町及び旧平田市一帯では、あまりそのような人物の名は出てこない。島村の開拓(三成七郎右衛門頼久)の例はあるが、川違えや新田開発は松江藩の公共事業として粛々と進められた印象が強い。

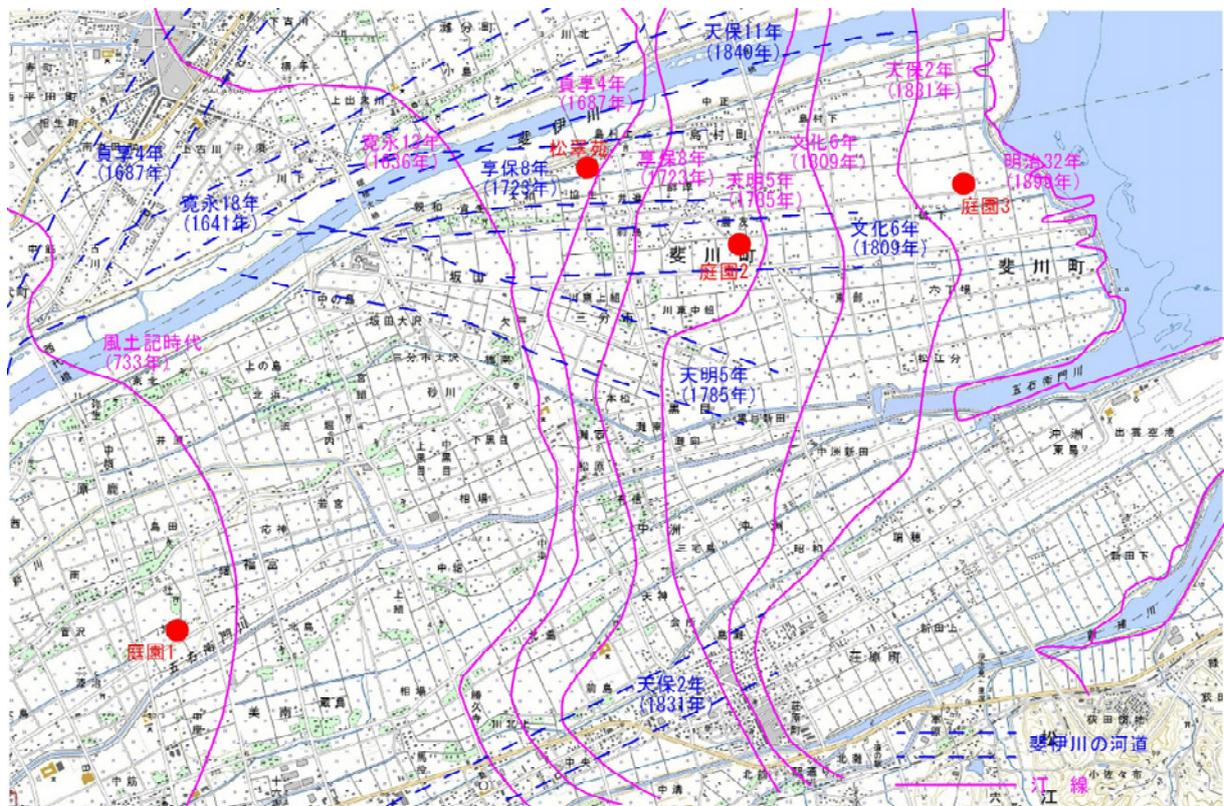
出雲平野東側では、洪水の被害は被ったものの、そのたびに土地が増え、さほど苦労はなく居ながらにして裕福となることができたと思われる。

今回視察した庭園は、そのような歴史を持つ斐川町に位置する。

### 3 . 斐伊川河道と宍道湖湖岸線の変遷

第2図に各時代ごとの斐伊川の河道と宍道湖湖岸線を示す。

斐伊川は東流以後、大きな氾濫のたびに流路が変わり、そのつど松江藩の公共事業によって半ば強制的に河道が付け替えられた。



第2図 斐伊川河道と宍道湖汀線図 (池田, 1999 池橋, 2004 岡, 1976)から転載・加筆

その結果、風土記の時代から東流までの約900年間に宍道湖の汀線は2km進んだが、東流以後の約350年間では3.5km前進した。これは松江藩による意図的な新田開発とかんな流し

による土砂量の増加が関係する。

このうち、一番最初に見た庭園1は、風土記時代には既に陸地であった場所に位置する。

客間(おもて)では近世になって描かれた水墨画を見せてもらい、つい最近までは周辺に沼沢地が多かったという説明を受けた。しかし、常に水没しているような状態ではなかったはずである。少なくとも、拝見した築地松や寿形松は相当の年数を経たものであった。家の世代も古く、周辺では江戸時代から十数代続く家系も多い。

庭園2は、1800年頃宍道湖湖岸線があった場所である。このあたりでは旧河道と後背低地(水田)との境がやや不明瞭となり、その比高は1~2mほどになる。庭園2は、数年前に作庭されたものだが、その際、大量の土砂を運搬して盛土した。現在では重機によって比較的簡単に施工できるが、その昔には庭を造ること自体が一大事業であったと推察される。

庭園3は、明治時代になってから陸地化した場所である。旧河道や自然堤防などの地形を読み取ることは困難である。明治以降に移住して農業を営なまれ、当主で2代目ということである。昭和になってからも、圃場整備前には至る所に沼地や笹藪、荒れ地が点在していた。昭和47年水害では床上浸水し、以前の庭の大半は水没した。昭和50年代に圃場整備が実施され、現在のような広々とした平坦地となった。庭はその後整備したものである。

#### 4. 築地松・屋敷構えと出雲流庭園の関係

出雲の庭はそれ単独で存在するのではなく、周辺の農村風景の一部である。庭の特徴は、築地松の型や屋敷構えと密接な関係がある(第1表)。

当然ながら、古い屋敷には古い庭がある。斐川町南側の山地に近い地域、つまり縄文海進時にも陸地であったような場所には、代々続く旧家が多い。このような屋敷では、近年に松を植えたような場合を除き、スダジイやタブノキが主体となっている。水に強く利用価値の高い竹林を東北部に伴うことが特徴である。庭の様式には変化が多く、寺院風あるいは池泉式などの要素を取り入れている例がある。山地に近いところでは、傾斜地を庭の背景にうまく調和させている。

第1表 斐川町で見られる築地の特徴 (有田, 1990)を要約・

種別	地域	樹木の種類	築地の特徴	庭との関係
古い型の築地 (10世代以上)	出西地区等の山地沿い	スダジイ、タブノキ、モチノキ、ヤブニッケイ、竹林	湿地に強いタブノキは平坦地、湿地に弱いスダジイは山手に多い。東北部に竹林を伴う。	古い庭が多い。典型的な出雲流ではなく、自然の地形を巧みに利用している。
中間型の築地 (10世代前後)	平野部の自然堤防沿い	上記に、クロマツが加わる。	強い季節風を受ける西側をクロマツとし、北や東側を雑木、東北部を竹林としたもの。	年数を経た庭が多い。手入れが行き届いた場合は見事な庭となる。(庭園1)
新しい型の築地 明治(4~5世代)以降	斐川町の中央部~東部全体	クロマツが主体。クロマツのみで囲まれる場合も多い。	一般には西と北側のみで見られる。築地松そのものが徐々に失われつつある。	作庭時期は新しい。平面的な余裕があるため、好みに合った庭を作ることができる。(庭園2、3、松翠苑)

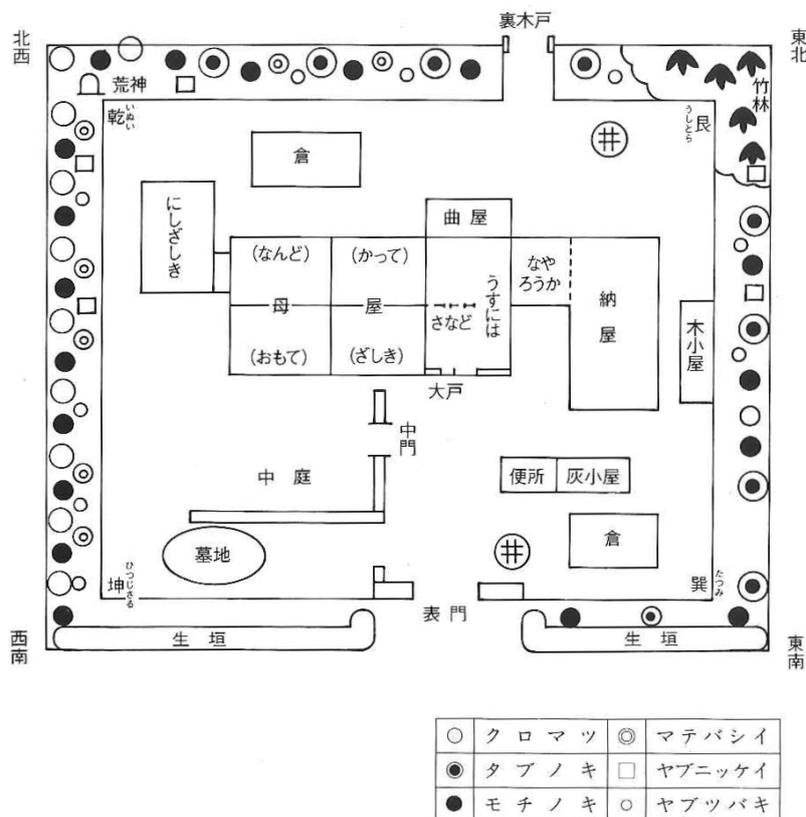
平野部に移り時代が下るにつれて、築地はクロマツが主体となる。そして西北東の三方を囲む屋敷森ではなく、西と北側、あるいは西側だけという形に変わっていく。その結果、建物や敷地の制約がなくなり、庭は思いのまま作ることができるようになった。

一方、斐川の散村を形成するのは、藁葺きの反棟を持つ農家だった。萱は相当経済力のある家でしか使われない。

南を正面として母屋を配置し、北西に荒神、西南に墓地、南の門に井戸、東南に蔵、東に納屋、その前に便所を配置するのが一般的である。庭は南西のおもての前に造られる。

現在では、これが瓦葺きはおろか、新建材・新工法による近代住宅に変化している。家屋が、古来からある築地松や庭と合わなくなっているように思う。

今後の庭園文化を考える上で、重要な課題である。



第3図 出雲地方の代表的屋敷構え(有田, 1990)

## 5. まとめ

今まで3年間にわたって島根県東部地域の庭園を拝見してきた。その結果、「出雲地方の庭園」という観点で見ると確かに共通点は多い。しかし一方で、斐川町、島根半島、松江市の丘陵地、奥出雲町、安来市の山間部など、それぞれ特徴的な庭園が存在し、その違いは地形や風土、歴史、社会環境に依るところが大きいことがわかった。

また今まで思いも寄らなかった場所に、大変魅力的な庭があり、大いに堪能することができたことも収穫である。

よって、今後は「出雲流庭園」とひとくくりにせず、様々な庭を発見し、その特徴と魅力を紹介していきたい。

## 6. 参考文献

- 有田宗一(1990)：築地松と民家，斐川町教育委員会，50-52.
- 池田敏雄(1999)：斐川の地名散歩，斐川町役場，155-156.
- 池橋達雄(2004)：荘原歴史物語，荘原公民館，95-96.
- 石塚尊俊(2004)：出雲平野とその周辺，ワンライン，176-181，199-246.
- 岡 義重(1976)：郷土斐川物語，斐川町有線放送電話協会，134-144.
- 高安克己(2001)：汽水域の科学，たたら書房，8-9.